【論点】

**実際の論文をみて、教育学の論文における主張とエビデンスについて考える**

◆エビデンスは論文が読者に受け入れられるかどうかを左右するもの

◇If they don’t believe the evidence, they’ll reject the reasons, and with them the claim.(p.130)

…もし彼ら（読者）がエビデンスを信じなかったら、彼らは理由を受け付けず、ひいては主張も受け付けないだろう。

⇒論文執筆の際にエビデンスは重要な役割を担っており、Chapter9後半で記述されている実際の取り組み方を見てみると…

◆何が正確(precise)かは研究分野によって違う　(9.4.2、9.4.3より)

◇Your reader want you to state your evidence precisely.（p.137）

…あなたの読者はあなたのエビデンスを明確に述べることを求めている。

◇What counts as precise, however, differs by field.（※詳細はレジュメ参照）

…しかし、何をもってpreciseなのかは分野によって異なる。

◇Different fields define and evaluate evidence differently. If you’re a beginner, you’ll need time to learn the kinds of evidence that readers in your field accept and reject. （p.115）

…違う分野においてはエビデンスの定義や評価も違っている。もし初心者であるならば、あなたの分野の読者が受け入れる、あるいは拒絶するエビデンスがどのようなものなのかを知る必要がある。

⇒結局、自分の研究分野においてどのようなエビデンスが求められ、記述しなければならないのかということは多くの例や批判にあたって自分で見つけるしかない。

◆では、実際に教育学の分野で書かれた論文を読み、その主張とエビデンスについて考えてみよう！

気付いたことや感じたことなどを話し合い、今後の研究を進めていく上での参考にしていきましょう！

扱う論文

•時代•明石要一「体験活動の効果及び評価のあり方に関する一考察：子どもの体験活動事例を追って」『千葉大学教育学部研究紀要』59, 2011, pp.167-173

•新川壯•濱田眞•山本佐江•有本昌弘「アセスメントを活用した学校改善：OECD•REAFISO研究と日本的エバリュエーション•アセスメント」『東北大学大学院教育学研究科教育年報』62(1), 2013, pp.325-338

体験活動の効果及び評価のあり方に関する一考察

―子どもの体験活動の事例を追って―

（主張）「(体験学習が)学級のあり方にもいい影響を与えることは認められた」(p.172)

（理由）「子どもが「非日常」から「日常」に戻っても、「チームとして学級」という凝集性が高まり、生徒間あるいは教員と生徒間に「一緒に過ごし、一緒に頑張った」という連帯感が増えた」(p.172)

（エビデンス）学級調査の結果(p.168，p.170)

◆学級調査とは？(p.168)

学級の様子を把握し、生徒指導と学級経営に活用される、廣部が開発した「学級調査」の20項目

調査対象は、１学年１クラスの学校(小規模校)の５年生、20名の子ども(男子：5名、女子15名)だが、うち、2名は未回答のため結果から除外

◆調査結果(p.170)

・図表６　14番生徒の「学級調査」得点の変化

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 項目 | | 事前 | 事後 |
| １ | 時間を守って行動ができる | １ | １ |
| ２ | 明るく楽しい雰囲気がある | －１ | ０ |
| ３ | 教科委員や係の仕事が行われる | －１ | ０ |
| ４ | 協力し合う雰囲気がある | －１ | １ |
| ５ | 授業中に落ち着く雰囲気 | －１ | ０ |
| ６ | 議長を中心に話し合える | －１ | ０ |
| ７ | 挨拶ができている | ２ | １ |
| ８ | いじめ・暴力に悩む人がいない | －１ | －１ |
| ９ | 男女の区別なく話ができる | －１ | －１ |
| 10 | 友達が分からないことを教えてくれる | ２ | ０ |
| 11 | 清掃の分担が果たしている | １ | １ |
| 12 | 担任と気軽に話せる | １ | １ |
| 13 | 行事をチームで取り込める | －１ | １ |
| 14 | みんな「〇小の生活」を守ることを心がける | －１ | １ |
| 15 | みんな温かく接してくれて不安がない | －１ | ０ |
| 16 | 学習に前向きに取り組める | ０ | ０ |
| 17 | 移動・着替えにテキパキ行動できる | －１ | １ |
| 18 | 教室の美化に心がける | －１ | －１ |
| 19 | リーダーを支える雰囲気がある | ０ | ０ |
| 20 | 自分の悪い点を注意してくれる | ２ | １ |

⇒実践前はマイナス評価が多いが、４・13・14・17でプラスに転じているため、「若干不満もあるが、学級に親近感が生れたと考えられる」(p.170)

・図表５　子どもの「学級調査」得点の変化

＊各項目で「良くできている」を２点、「ほとんどできていない」を―2点として得点化した。

＊横軸は子どもの番号で、縦軸は学級調査20項目得点の合計

⇒「全クラスの20名の子どもの多くは、実践前と比べ、体験活動後にクラスへの評価は高くなっている。その中で14番の生徒は事前のマイナス評価から事後のプラス評価へ転換したことに注目したい」(p.170)

アセスメントを活用した学校改善

-OECD・REAFISO研究と日本的エバリュエーション・アセスメント-

（主張）日本独自のエバリュエーションとアセスメントの在り方はREAFISOにおける矛盾\*を乗り越える一つの手段である(p325)

（理由）なぜなら秋田県での取り組みは、大規模アセスメント自体を分析対象にして実践現場に対する知見を生み出そうとするのではなく、全国学力調査のような大規模アセスメントに対して、独自の分析、活用を行いながら、学校評価や教員評価も盛り込んだ、包括的なカリキュラム改善・学校改善に取り組むものであり、成功しているからだ(p327)

（エビデンス）

・秋田県で重要視されてきたのは「一人一人の子どものためにどう活用すべきか」教育現場としてどのように「活用責任」を果たしていくかにある(by学校長,p327)

　→学校教育課題である以下の3点の実践例

①「学力」の基盤となる「生活・学習習慣」の改善

②「知識」と「活用」が一体となった学力の育成

　　　③「学校」と「家庭」が一体となった教育の推進

・たとえば①の場合

「学校での活動は、課題別クループによるインタビューや質問紙調査が1年生の段階から実施されており、…最終的に各自の目標策定に結実させるという、段階的な発展性が担保されている。また、これらの活動は教科を横断して実施されており、このことが後述する教科の枠を超えた知識活用力の育成にも繋がっている」(p330)

※REAFISOにおける矛盾

REAFISOのねらい

・「エバリュエーション・アセスメント政策が初等中等教育における生徒のアウトカムを改善するのにどのくらい機能するのか」について既存の研究を整理し、「包括的な政策課題に取り組む国々に分析や政策提案を与える」ために作られた研究レビュー

・OECDはこのレビューを通じて「各国において学校で作られる生徒のアウトカムの改善目標がエバリュエーションアセスメントの枠組みとしてどのような要素を持っている」のか明らかにし、「各国のエバリュエーション・アセスメント政策に新たな価値を付加する」ことを目指している(p326)

しかし

①アメリカの情報に依存している、②探すのに費用のかからない見つけやすい文章に依存している、③経済学者と教育学者の研究に依存している、④心理学やアセスメントや測定の専門家である社会科学の知見を無視している、⑤重要な研究の大部分を無視している、⑥REAFISOの研究がアメリカの(失敗した)急進的構造主義の立場に偏っている、⑦費用削減のため、特定の研究グループに研究委託され、インターネットを用いた適切で無い方法でデータを収集している

→大規模アセスメント自体を分析対象にして実践現場に対する知見を生み出そうとすることには大きな危険がある(pp326-327)